

山形国際ドキュメンタリー映画祭2011 それぞれの視点

.....①

山形国際ドキュメンタリー映画祭2011(10月6~13日)には、国内外から監督や研究者、評論家が多く訪れた。240以上もの作品を上映した今回の映画祭で、何を見、何を感じたのか。それぞれの視点で振り返ってもらった。

初めての山形国際ドキュメンタリー映画祭。私は2作目となる作品「さようならUR」で参加した。これは、公共住宅の削減、住民の追い出しをテーマにした映画だ。

戦争、基地、原発、貧困、差別など、私たちの社会が抱える問題を解決しようと立ち上がる市民の多くは高齢者になっている。現役世代の多数は、契約社員や派遣社員など、安い時給の不安定な雇用形態で働き、高い家賃の負担に苦しんでいる。こんな生活では、どこかで「起こっている戦争や、誰か」を抱えている問題に関心を持ったり、行動を起こす余裕など生まれるわけがない。それでは為政者の思うがままで、社会は良くなるまい。

私自身は「映画監督」を名乗りつつ、実態はライターで、居候生活をしながら

早川 由美子

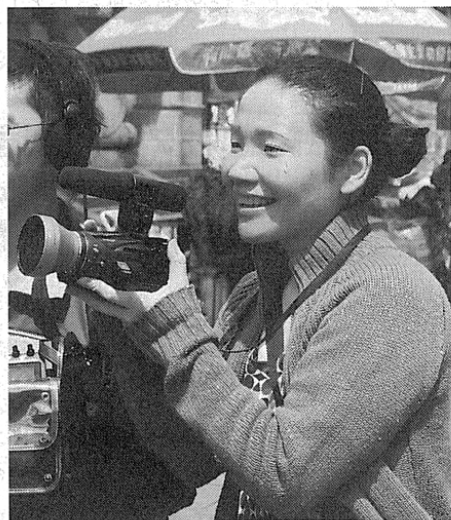
ドキュメンタリー映画監督

国内外の監督から刺激

ら映画を作っている。(請求はされているが)家賃の負担がないので、社会的な問題に関心を持ち、収入にはなりにくいドキュメンタリー制作を続けていられ

「ア！」という発言まで飛び出した。憧れの映画祭で上映されたという今回の経緯は、この先ずっと忘れることはないだろう。

を受け、自分でメディアセ



©Wei Xiaobo

る。よって「より良い社会は、低い家賃によって実現する」という大胆な仮説を立て、安価な住宅の代表である公共住宅をテーマに映画を作ったのだった。

私の映画の上映中、UR(旧住宅公団)の不誠実な対応にはため息が、立ち退きを要求されても余裕で構える女性の態度には笑い声が、そしてUR理事長への直撃取材では拍手まで起こり、驚くと同時にうれしく思った。上映後の質疑応答では「日本のマイケル・ムドキュメンタリー監督が育

大規模な国際映画祭に参加するのは初めてだったのだから、国内外の来場監督の多さに驚いた。映画祭期間中に、監督たちと交流し、お互いの制作について語り合っ

「ここにおるんじゃけえ」を上映した下之坊修子監督と共にインタビューをさせてもらった。そのビデオの編集作業のため、映画祭期間中に毎日発行される新聞

中でも、ベトナムのグエン・チン・ティ監督との出会いが印象に残っている。長い間社会主義体制が敷かれた、あらゆるメディアが国によって支配されてきた家によって支配されてきた

「デイリー・ニュース」の編集室に1日半こもった。ていきたい。

その間、全く映画を観られなかったのは残念だが、一方で、夜遅くまで編集室で働くスタッフ、ボランティアの方々の仕事ぶりを間近で見ることが出来た。大きな映画祭が開催・運営できるのは、彼らのおかげなのだと思ふ。

▽はやかわ・ゆみこさんは1975年東京生まれ。成蹊法学部、ロンドン・スクール・オブ・ジャーナリズム卒。初監督作「ブライアンと仲間たち パーラメント・スクエアSW1」で2009年日本ジャーナリスト会議黒田清J C J新人賞。監督2作目の「さようならUR」が山形国際ドキュメンタリー映画祭2011でスカパー！IDEHA賞受賞。ウェブサイトはwww.petiteadventurefilms.com